

しっかりと生きて行こう

悩みは相対化することにより小さくなる

みなさん、お元気ですか。厳しい寒さの冬も、梅の開花と共に、山場を過ぎつつあるように感じられます。私は、巳年の今年、`年男`です。そのせいか、とにかく年初から、忙しく飛び回っています。今月末は、バングラデシュに行きます。五年来準備してきた「日本語教室」が、ようやく正式な開所式ができるところまでこぎつけられました。その式典に参加します。来月末は、シカゴ、そして再来月は、`お掃除の会`の台湾大会に、講演のために出掛けます。年齢不相応の多忙さに、ある意味、うれしい悲鳴を上げています。

二月は、終日在宅する日が、三日しかありません。その一日、久しぶりに、終日、在宅しました。外出しなくていい日は、私にとっては、ゴールデンタイムです。たいていの人達は、「たまにはどこかに行きたい」と言います。私は、「たまには家にいたい」と思っています。

`明けない夜はない`と三浦綾子さん

久しぶりに、家の中をゆっくり見回してみました。普段、気にも留めていなかった洗面所の前に掲げているカレンダーに、目が止まりました。私が尊敬する三浦綾子さんの言葉を綴ったカレンダーです。ご主人の三浦光世さんが、毎年送ってくださいます。そこには、「明けない夜はないと思い、明けた暁には喜びが待っているのだという希望に、心が燃えるのだった」とあり、そのそばに小さな字で、「どんなに悲惨な状態であっても、やがては喜びうたう日が来るであろうと、そのような希望を持つ時、人間は不思議な力を与えられるものだ」とありました。

そのカレンダーを見ているうちに、三浦綾子さんのことがありありと記憶によみがえってきました。三浦綾子さんは、私の尊敬する師の一人です。何度も、旭川のお宅を訪問して、親しく話をさせてもらったことがあります。

首を動かすこともできなかった闘病時代

三浦綾子さんは、自らを、`病気のデパート`と言うほど、次から次に大病を患いました。脊髄カリエス、大腸がん、パーキンソン病。中でも若いころ、十三年間も、脊髄

※裏に続いています

カリエスに苦しみました。そればかりか、七年間は、ギブスをはめて、首をまったく動かすこともできませんでした。寝返りさえ打てなかったそうです。どれほど苦しかったことでしょうか。しかも、友達がお嫁に行くような年頃のこと。長い間、人生を絶望していたそうです。当たり前のように寝返りを打ち、好きなものは何でも食べられるわが身にとっては、想像さえできない苦しみの連続でした。その時の三浦先生の苦しみを思うと、たいていの苦しみに耐えられる気がしました。

三浦綾子さんが、絶望的な精神的苦悩から立ち直ったのは、一人の男性のたった一言でした。`人は生きる権利と共に、生きる義務がある`。三浦綾子さんは、`生きる義務`の一言に、目を見開かされたのです。私達は、`生きる権利`ばかりを考えがちです。権利にとらわれると、「死ぬのは私の勝手でしょ」となる。「生きる義務」に目覚めれば、この世に生を受けた限りは、どんなことがあっても、生き切らなければならないのです。三浦綾子さんは、絶望的な病気だから生きたくないと考えていた自分の見方の間違いに気付いたのです。と同時に、「それに気付いて、生きる勇気が湧いてきた」とおっしゃいました。

悩みは、そればかりを見つめていると、どんどん苦しくなるものです。悩みを絶対化すると、押しつぶされそうになります。私は、悩みが深い時には、そればかりを見続けるのではなく、悩みを相対化することを心掛けてきました。例えば、何か悩み事があり、行き詰った時、海岸に行きました。幸い、松下政経塾の敷地から歩いて五分も行けば、湘南海岸です。海岸の砂浜に座って、じっと海を見つめているのです。はるかかなたから押し寄せてきた波が、繰り返し波打ち際で砕け散る様子をじっと見ていると、「この海は私の生まれる遥か彼方の昔から、押し寄せ、砕け散り、引いていった。そして、私が死んだ後も、繰り返し押し寄せ、砕け散り、引いていく。それに比べたら、私の悩みなど実取るに足りない小さなものだ」と、いつの間にか思えるようになりました。人間をはるかに超える大自然の前に立つと、自らの悩みの小ささが分かります。それが、私の言う、`悩みの相対化`です。

辛い思いをしたからこそ書けた小説

私は、三浦綾子さんの作品をほとんどすべて読んでいます。すべての作品は、「生きる勇気」の一点において共通しています。私に、「私は病気ばかりしていました。その辛い思いの連続が、私に作品を書かせました。私が健康だったら、これら作品は書けなかったと思います」と語ってくれたことを鮮明に覚えています。

人は、病気の連続の人生を送ることによって、人に、「生きる勇気」を与える力を備えることができるのです。大腸がんになった時、「不思議に気持ちが落ち着いた」とおっしゃいました。「神様は、あなただったら耐えられると、特別に私を選んでくださったと思うと、むしろ喜びの気持ちさえこみ上げました」と聞いた時、私自身もまた、あらゆる困難に耐える力を授かったように思いました、忘れがたい思い出です。『難有る』は、『有難い』。まさにそれこそが、`生きる力`です。今年もしっかりと生きましょう。

『夢甲斐塾』

塾長 上甲 晃